涼宮ハルヒのけいおん！

椎野樹

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
涼宮ハルヒのけいおん！

【Ｎコード】
Ｎ９４６７Ｇ

【作者名】
椎野樹

【あらすじ】
涼宮ハルヒが世界を見限った？ＳＯＳメンバーはそれぞれの思惑により世界を取り戻すために行動を開始する。一方、田井中律らの軽音部部室に一人の少女が現れる。

序（前書き）

縦書きの判型で執筆しておりますので、縦書き表示かＰＤＦを利用して読んで頂けると、より楽しめますのでおすすめです。右上の「たてがき」をクリックすることで縦書きモードが起動します。

序

■ＳＯＳ　＃００

私は一人窓辺で本を読んでいた。３年生が受験で皆、退部してからというもの文芸部には私一人しかいなく、開店休業。実際の所は廃部を待つだけだけである。――ここまではシナリオ通り。「彼女」が訪れる事はすでに統合情報思念体により演算完了しており、後はコンタクトを待つのみだった。

……遠くから、廊下を大きな音を立てて走る音が聞こえる。また一つ大きな音が起きた。

どうやら転んで周りの人に謝っているらしい。

その音の主は文芸部の前で止まった。ガラリと戸が開け放たれた。

「こんにちわー！私、平沢唯って言います。ここ文芸部だって聞いて来たんですけど、入部希望ですけど大丈夫ですか？」

「……大丈夫」

「えへへ私、本大好きなんです！百回死んだねことか読んだだけでもう涙が止まりませんでした。グズッ」

「……百万回生きたねこ」

「それで先輩はお名前はなんって言うんですか？」

「長門有希」

「へえ、じゃあ長門先輩ですね。私のことは唯でいいです。今日は用事があるんで帰ります。明日からよろしくお願いします！」

私は本を閉じ窓辺に立つ。

やはり恐れていた可能性が現実になったのだ。この世界は「彼女」にとって意味を無くしてしまった。保持する力を失った世界はやがて拡散してしまうのだろう。それは熱湯が漸次的に熱を失って行くように、少しずつ世界が解けていく事を示している。

……それと同級生に向かって先輩と言い放つのはいかがなものか？

「……ユニーク」

□Ｋ－ｏｎ　＃００

同時刻、軽音部室

秋山澪、田井中律、琴吹紬が軽音部部室で雑談中の出来事だった。
「やっぱりもうあきらめて廃部にした方がいいんじゃないの？　律」
「馬鹿言わないで澪！　約束したじゃない！小学生の時にいっしょにバンドを組んでメジャーになろうねって」
「言ってない」
「それにしてもどうしましょうか……今週中に部員４人を集めないと廃部です」
「あーあーあー聞こえない。ムギちゃんの言ってることなんて聞こえない！」
そのとき扉が盛大な音を立てて開いた。三人が振り向くとそこには黄色いリボンで髪をアップにまとめた少女が腕組みをして立っていた。あっけに取られている三人を睨み付け、高々と宣言した。
「今日からこの部室は我々のものよ！」
「……」
「……」
「……」
軽音部室をおびただしい数の天使の群れが通過する。闖入者の目はあくまでも座っている。どうやら本気のようだ。田井中律は沈黙に耐えかねるように切り出した。
「……あんた誰？」
「一年五組、涼宮ハルヒ！　聞こえなかったかしら？　この部室は我々の活動で使わせてもらうわよ！」
「我々って……あんた一人じゃない……」
「それはいわないほうが……律」

「とにかく、あんたたちにも協力して貰うわよ。目標はメジャーデビュー！　今月中までには形になっていて貰わないと困るわ。来年までにはアメリカ進出も狙うから」
「ちょっといいですか？」
「話しかけない方が……ムギ……」
「あなたも軽音部への入部希望者なんですよね？　それならば何か楽器の方を演奏できるのでしょうか？」
「あったりまえでしょ。楽器ぐらい演奏できないわけないじゃない」
律は皆を手招きし、小声で話し合い始める。
「どうすんのよ、あれを本気で入部させるわけ？」
「現状ではどんな方であれ入部していただきたいのですが……。あの方は少しむずかしそうですね」
「実際に演奏させてからそれで判断したらどうかな？」
「そうだな、それで追い出そう」
律は肩をすくめハルヒの方へ身体を向き変えた。アメリカ人の様な大きなジェスチャーを交えつつ言った。
「それじゃあ、とりあえず入部試験の方をさせてもらうわね。何でもいいから好きな楽器を選んで演奏してちょうだい」
「ふーん好きな物を選んでもいいわけね。じゃあこのエレキを借りるわよ」
おもむろに音楽室にあったエレキギターを取ると即興で演奏を始めるハルヒ。コード進行もなめらかに、チョーキングとビブラートを自在に駆使した泣きのギター。そこにミュージシャンがいるならば泣いて土下座をするだろう完璧な演奏をやってのけた。
「……」
「……」
「……凄い」
「この程度は楽勝よね。言い忘れてたけど私が団長だから。各自練習は怠らないようにしなさい。明日の同時刻にここに集合。それじゃ私は急ぐから行くわよ」

言いたいことだけ言うと涼宮ハルヒという嵐は去った。そこには魂を抜かれた三人のぬけがらだけが残ったのだった。

■SOS　#01

次の日、長門有希は文芸部部室にいた。いつものように不動の姿勢で椅子に腰掛け、時でも計っているようなタイミングでページを繰るのだった。部室の外からなにやら揉めているような人の声が聞こえる。

がらりと戸が開く。そして平沢唯と、もう一人の少女が入ってきた。

「こんにちは長門先輩。この人、入部希望らしいですけど中に入れなくて外で困っていたからつれてきちゃいました」

その少女は、朝比奈みくるだった。みくるは長門の顔を見るとなにやら安堵したようである。

「長門さん……。よかった、知っている人が誰もいなくなっていたらどうしようかと思いました」

「問題ない」

「――でも、キョンくんはいないんですよね……」

「……」

みくるは顔を伏せると、えぐえぐと子供のように泣きじゃくり、崩れ落ちた。その背中は今まで押し隠してきた苦痛を伝えるには十分だった。

「ちょっと……大丈夫ですか？」

唯はみくるの元に駆け寄り、肩を抱いてやる。みくるは泣きながら何かをつぶやいている。

「何で……どれだけ時間を遡っても……グスッ……どうして、何で過去の痕跡まで消えているのっっ！……」

長門は本を閉じて、立ち上がった。

「朝比奈みくる、来て欲しい」

そう言うと、みくるを顧みもせず廊下へ出ていってしまった。

しばらく打ちひしがれた様にしゃがみ込んでいたみくるだったが、

幽鬼のごとく立ち上がると長門の後を追い部室から出て行こうとする。
「ちょ、ちょっと待ってください。大丈夫なんですか？なんかすごい顔色悪いですよ！」
「……大丈夫。すぐに戻るから……あなたはここで待っていてね……」
みくるは弱々しく微笑み、そして出て行った。

「……長門さん」
長門有希はねじが切れた人形のように、窓際で立ち尽くしていた。命令が無ければ彼女はそのまま何百、何千年でもそこに立ち続けるのだろう。
人形は言葉を紡ぎ始める。
「現在の状態と今後の予測だけを簡潔に伝達する。それ以上は朝比奈みくるが持たない」
「……はい」
「現在発生している現象はすべて、涼宮ハルヒの世界改変によるもの。原因はパーソナルネーム・キョンの交通事故死による、涼宮ハルヒの精神の自壊」
「……ぅうう……いやぁ……」
記憶が蘇る。救急車。泣き叫ぶ声。そして、全てを失い己の内に閉じこもってしまった守るべき彼女の姿を……。
「観測される現象としては世界改変により、物質の存在する確率に歪みが生じている。そのため過去・現在・未来の全ての時間軸における物質の存在する確率が不安定な状態」
あの事故を消し去ってしまえば全てが元に戻る。そう思い、みくるは禁則事項を破って探索したのだが、キョンは時間ベクトルの中に存在自体が『なかった』。
涼宮ハルヒの自閉した精神が引き起こした改変が、あの事故に関連する全てを抹消してしまったのだろう。

「予測される事象として、確率論的平行宇宙の衝突。現時点では近接状態ではあるものの小康状態は保たれている。しかし衝突が発生した場合、物質の存在確率の矛盾が発生し物質は素粒子にまで分解される。この現象が連鎖的に発生した場合、宇宙間全物質の物理構造が破壊されるビッグリップ的終焉が双方の宇宙で発生する可能性が高い」

そこまで言い切ると長門は沈黙した。みくるは絞り出すような声で尋ねた。

「方法は……あるんですよね？」

長門は感情の籠もらない声で語り出す。

「現在、統合情報思念体は平行宇宙近接の対応を行っており３０％程度のリソースしか利用できない。スタンドアロンとしての“長門有希”では演算結果に誤差が生じるかもしれない。でも、わずかな確率ではあるが涼宮ハルヒの世界改変をキャンセルする方法が存在する」

朝比奈みくるは、守るべき未来も、帰る故郷も、好きだった人も失ってしまった。世界は崩れ終焉を迎えようとしている。逡巡する理由などあるのだろうか？

「それは……」

幼い頃からいつも運命に流され続けていたみくるは生まれて初めて、運命と戦う決意をした。

「……いったいどうすればいいんですか？」

□K－on　#01

秋山澪は六時限目の授業が終わると荒々しく荷物をまとめ、教室から全力ダッシュで出て行った。

澪は涼宮ハルヒと出会った時、直感的に、感覚的に、なんとなく、そこはかとなく、でありながら確信的に、嫌な予感がよぎった。このまま順当にいくと彼女のポジションは、かなりの高確率で『いじられキャラのあの人』の定位置だと言うことを。

見た目はクールに見え、気丈に振る舞ってはいるが、実は、超が二三個付くほどのシャイな彼女にとって考えるだけで背筋に氷を放り込まれたように悪寒を感じる緊急事態であった。あのポジションだけは死んでもお断りであった。

怒鳴ってだろうが、謝り倒してだろうが、いかなる手段を講じてでも涼宮ハルヒの行動を阻止しなければならない。さもなければ、今後一生に渡って思い出すたびに枕に顔を押しつけてバタバタと暴れたくなる致命的なＰＴＳＤ（トラウマ）を形成する事は目に見えていた。

――ここにも、運命を変えるために戦った一つの物語があった。

澪は、ハルヒのクラスである一年五組を訪れてみた。そこらをブラブラしていたオールバックが特徴的な人と、背が低い中性的なクラスメイトを呼び止めて涼宮ハルヒについて尋ねてみる。

「涼宮？　奴に関わるのだけはよしておけ。あいつのサイコぶりは常軌を逸しているからな」

「結構変わった人だよね。涼宮さんとあんまり喋った事が無いからどんな人なのかよくわかんないんだけどさ」

やはり常識から遠ざかった変人であることは分かったのだが、行動パターンや嗜好などの詳細が分からない。

「朝倉さんなら何か知ってるかもしれない。一番仲が良いのは彼女だから」とのことなのでクラス委員の朝倉涼子を訪ねることにした。

クラスメイトに尋ねると、朝倉涼子が文芸部へ行ったということなので、文芸部室へ来た。
……誰かが中で話してる様だ。澪は仕方が無いので廊下で待つことにした。
「――……位相情報……、……ハイゼンベルグ……観測点……。――――……執行代行者――を確認……。認証、朝倉……」
「??」
何を話しているのだろう?聞き覚えのない単語が頻出している。少し聞き耳を立ててみた。
「……」
「涼宮ハルヒをどうするつもり?」
「……」
「安定状態までもう少しだったのに、彼女を見捨てるとは言わせない」
「……」
「外部の組織を引き入れた責任は持てるんでしょうね?」
「……」
「あなたがそんなに焦っているのは初めてね。可能性があるからといっても、それじゃ完全にあなたの独断専行じゃない！　バックアップに回る私の事も考えて欲しい」
「……」
どうにも完全に理解不能だが、朝倉が本気でに怒っているらしい事は分かる。
（タイミングが悪かったかなー……）
文芸部部室より誰か出てくる気配を感じた。何となくバツが悪いので物陰に移動してやり過す。
朝倉が行ってしまった後、澪はそっと文芸部部室をのぞいてみた。生暖かな西日が差し込むカビ臭い空間が広がっているだけだった。

……部屋の中央に何かが落ちている。

澪はそれを拾った。

涼宮ハルヒと、仲間らしき人物たちが写っている写真だった。

違和感を感じる。何かがおかしい。

文芸部は数日前には存在していたはずだ。突然何年も前から、この世から消えてしまった様に廃墟と化しているこの状況はあり得ない。

この写真の写っている間取りは全くおなじなので、おそらくこの部屋で撮られた事は間違いないだろう。

澪が通っているこの学校、桜高は『女子校』である。この写真のように男子生徒が写っている事はまず無い。涼宮ハルヒはセーラー服を着ているが桜高の制服はブレザーのはずだ。

――そこまで考えて身体の底から震えが来た。澪はオカルトやホラーなどの超自然現象に全くといっていいほど耐性が無い。だが思考は止まらない。ここまでの前提を結論に結びつけると、涼宮ハルヒ、彼女は……

「……幽霊？」

次の瞬間、澪は文芸部部室より全力疾走で逃げ出していた。

澪は息を切らして、軽音部部室に駆け込むなり叫ぶ。

「律、ムギ。大変な事が分かったぞ！　あいつは――……」

そこまで言うと澪は、鞄をぼとりと落として硬直した。

そこでは三人の女子高生がティーセットを囲みお茶会をしていたのだが、その服装においていささかの問題があった。

琴吹紬は、キャップに赤十字のマーク。病院ではお目にかかれないであろう真ピンクのナース服に身を包んでいた。

田井中律は、髪型を二つのお団子に纏め、太ももまで見える大胆なスリットが入っている赤いチャイナドレスを着込んでいる。

「あら、みおちゃん。遅かったですね」
「よお澪、なんで固まってるの？」
長い耳と短いシッポ。ハイレグカットに網タイツ。バニーガール完全装備で足を組んでいる涼宮ハルヒは、ゆっくりと、

――嗤ッタ。

怖い。めちゃくちゃ怖い。
目が笑っていない凶悪な笑みは完全にホラーだった。このじんわりと浸食してくる恐怖は海外製ではなく、純和風ホラーのそれだった。
混乱した澪はその場で回れ右をして逃げようとしたが、その背後には女教師・山中さわ子が立っていた。その目は獲物を狙う猫科猛獣の目である。

「……メイド服でいいのかな？　はるちゃん」
「ええそうね。さわちゃん」

軽音部部室の扉が静かに閉じた。

文化部室棟で女の悲鳴が聞こえるという噂が流れ始めるのはそれから程なくしての事だった。

■SOS　#02

古泉一樹の所属する『機関』は、いまや壊滅状態である。観測不能なほど巨大な閉鎖空間が三年前に発生していた。不思議な事にその中では通常の空間と変わらず人々が活動することができたのだ。また、閉鎖空間で現れるはずの神人は出現しなかったのだ。

しかし、機関に所属する超能力者達は、その事態と同時に理解した。閉鎖空間と通常の世界が入れ替わってしまったのだと言うことを。それは世界の終末を示していることを。

そして超能力者達には凄惨な運命が待っていた。あるものは謎の怪病による病死、あるものは偶然外れた4トントラックのタイヤに激突されて圧死。また雑踏の中で突如、行方不明になるという不可思議な現象まで発生した。それはあたかも不要になった登場人物たちが不条理に殺されて行く様を見ているようであった。

割と絶望的な状況でありながら、古泉一樹は飄々としていた。それは性格的な物もあるかもしれないが彼自身、機関の手足として行動することに嫌気が差してきていたことも関係があった。世界崩壊の危機の中にありながら未だに対立、謀略、裏切りを続けている機関の上層部に飽き飽きしていたのだ。

古泉は空を見上げた。

そこには、空一面を覆う巨大な神人が佇んでいる。宇宙空間より眺めたら、地球を抱くようにしている神人の姿を観測することができたであろう。おそらく、この神人が身動ぎ一つしただけで人類文明は消え去ってしまうのは確実だ。世界中の超能力者を集めても、この神人を倒すことは不可能なことは分かっていた。つまりは、人類はもうすでに”詰んで“いた。

古泉は微苦笑を浮かべながら呟く。

「こんな時、あなたならどうしたのでしょうね？」
やたらネガティブで、観測範囲外より難癖をつける事が得意なくせ、それでいていつもおいしいところを全部持って行ってしまう、あの友人。そのしかめっ面を思い出して古泉は、苦笑した。

□K－on　#02

琴吹紬は悩んでいた。
新しく軽音楽部に入ってきた涼宮ハルヒの事だ。彼女と打ち解けようと紬はがんばっているのだが、どうにも彼女はこちらを拒否するような態度をとるのである。
「涼宮さん、お茶のおかわりはいかがですか？」
「いらない」
「でも……」
「うるさい」
終始この調子なのである。ハルヒは興味が有る物に対しては異常に執着するのだが、それ以外には無関心、というより憎悪しているように思える。
深窓育ちのお嬢様である紬にとって、ハルヒのこの態度は腹が立つというより、悲しかった。

秋山澪はティーカップを持ち上げながら思い出したように話を切り出した。
「そう言えばさ、ハルヒのギターって無かったよな」
「そう言えば、そうですね」
「いつまでも学校の備品を使っているわけにもいかないだろ。あのギターはネックが反っているし、弦も錆びてるし」
田井中律は片眉を上げながら答える。
「ふーん、新しいギターを次の休みにでも、買いに行った方がしれないね」
涼宮ハルヒは腕を組みながらうなずく。
「それは良い意見ね。ただ最高にクールなやつじゃないと許さないから」
律はおまえの意見は聞いてねえと眉をひそめつつも、とりあえず

意見をまとめにかかる。
「じゃあ今度の土曜日の十一時に駅前で集合。そっから楽器店に行くよん」

土曜日。日が高く登り切った頃に軽音部のメンバーの四人は集まった。駅前は休日の初めであることもあり、学生も多く通りを歩いている。四人はとりあえず駅前の通りを冷やかしながら楽器店を目指すことにした。

澪と律が、駅前通りにある雑貨店で見たい物があると、店に入っていった。紬とハルヒは二人で通りで待つことになった。
「……」
「……」
二人の間を沈黙が流れる。ショーウィンドウに人形が飾られていたのを見つけた紬は、それをネタにしてハルヒとの雑談を試みることにした。
「この人形、生きてるみたいですね。アンティークドールでしょうか？」
「知らないわよ。別に」
ハルヒは車道の向こう側にある店をぼんやりと眺めている。こちらを振り返ろうともしない。紬の話など聞く耳が無いようである。
紬は今まで気になっていたことを、思い切ってハルヒに尋ねてみた。
「涼宮さんはどうして軽音部に入ろうと思ったんですか？」
ハルヒは、ふと思い出したように答える。
「私は、有名になってもっと多くの人に存在をね、気づいてもらわないといけない気がするのよ」
「……それは有名人になりたいということなんでしょうか」
「違うわ。そう言うことではないわね。そうすることが必要な気がするの。なにか、不安定な物を埋めるために私はいる。そんな気が

するのよね」
「……？　それはどういうことなんでしょう？」
バァンと大きな音を立て雑貨店の扉が開いた。
「おーい、ムギちゃん、ハルヒ。ちょっとこれ見てよ！」
「律こら、ちょ、引っ張るな！　ムギもハルヒもこっちみるなぁぁ！」
律がずるずると雑貨店から引きずり出してきたのは、頭の両脇からびょこんと三角型の耳が飛び出した、ネコ耳付きの澪だった。
「隅っこのほうで、こそこそしてるから何してるのかなと思って、覗いてみたらネコ耳かぶってたんだよ澪のやつ」
「うるさい！　バカ律！！　はなせぇっ」
律が笑いながら引っ張っているが、澪はドアの縁にすがりついて離れようとしない。
ハルヒは腕を組んで、その様子を観察してふむと頷く。
「ふぅん、どじっこスクミズゴスロリ風ネコ耳メイドね」
また一つ、秋山澪の属性が増えた瞬間であった。

澪が泣いて嫌がるのでネコ耳は部室までは外してもよいことにした。もういい加減に楽器店を目指しても良い時間である。一行は楽器店に向かうことにした。
その楽器店は地下一階にあり、階段を下った先にある防音扉を押し開けた。そこにはエレキギターやアンプ、ドラムスのパーツなどが陳列されていた。
四人は、ギターが置かれたコーナーで、ハルヒのギターを選ぶことにした。澪がギターの一つを取り上げ鳴らしてみる。
「このあたりが良いんじゃないか？　それなりに軽いし、ネックも細いから扱いやすいだろ」
「やーよ、そんなだっさいの。わたしはこれに決めたわ」
「……フェンダー・ムスタング１９６５' って、ヴィンテージだろこれ！　いくらするんだよ！」

「あそこに値札があるわよ」
ハルヒが指さした先の値札には三の後ろにゼロがずらりと並んでいた。
澪はその場にうなだれた。
「あのなぁ、ハルヒ。ヴィンテージギターは、扱いに癖があるしメンテ費用がものすごく掛るんだぞ。初心者が初めて買うギターじゃないだろ」
「わたしが演奏するんだから関係ない。それにファンはブランドにはこだわるのよ。いくら演奏が凄くてもチープな楽器を使っていたら興ざめだわ。あなた達にもコアなファンが付くかもしれないわね。今の内にサインの練習はしておきなさい！」
「三十万円もだれが払うんだよ！　バカっ！」

やりとりをそばで聞いていた紬は、チャンスだと思った。この音楽店は父の経営している企業グループの子会社である。店員と交渉して、ハルヒのギターは値引きできるかもしれない。
「あの、私に任せていただけませんか？」
律が驚いたように尋ねる。
「ムギちゃん！？　三十万も払えるの？」
「いえ、店員さんにお願いをして、値引きをしていただこうかなと思いまして」
「えぇ？　無理でしょ」
「ふふ、行ってきますね」
会計カウンターまで来た紬が見たのは、店員の襟首を掴み上げている涼宮ハルヒの姿だった。
「だーかーら言ってるでしょ！　出世払いよ、出世払い！　この店で買った客がプロになるのよ。そうなると嬉しいでしょ？　感謝して欲しい位だわ」
「わっ、分かりました。お支払いは半額でいいです」
「あんた、音楽に対する情熱はそれだけなの？　世界を変えるアー

ティストがこの店から生まれるかもしれないのよ？　少しは頭をやわらかくして柔軟に考えなさい」
ハルヒは店員の頭をガクガクと揺する。
「分かりました、無料でいいです……」
離れた所でそれを見ていた紬は悲しくなった。
（私はいらないのかもしれない）
紬は走り出し、店を飛び出していった。

店を出た紬は、とぼとぼと街の雑踏の中を歩いていた。律たちの元へ戻る事を考えるのも億劫なので、ただ前へ前へと足を進めているだけだった。
紬の肩が突然、後へと引き込まれた。驚いて後ろを振り向くと知らない男が肩を捕まえていた。
「なー、今日はコイツでいいんじゃないすか？」
男の後ろには、三人の男達がへらへらと笑いながら立っている。
「お嬢様みたいな女がいいんだろ、おまえ」
顔を歪めて、薄気味悪い目を向ける。
「いーんじゃねー」
男達は、紬の手を掴み路地裏へと引っ張って行こうとした。

「私の団員になにしてんのよ！！」

駆け込んで来たハルヒの飛び蹴りが紬の手を掴んでいる男の顔面を正確に捉える。恐るべき事に胴回し回転蹴りであった。過剰防衛もいいところである。
立ち上がったハルヒの一睨みで男達は蜘蛛の子を散らすより速く逃げていった。腰が抜けた紬は、呆けるようにしてその様子を見ていた。
男達が逃げ去った後、倒れている紬に対して、ハルヒは手を差し出す。

「早く立てば」

紬の目にはナンパ男達を一瞬で蹴散らしたハルヒの周囲がうっすらと輝いて見えた。

お嬢様として厳しく躾けられていた紬は、両親よりマンガやアニメなどの視聴を一切禁じられていた。しかし、そんな制約など今日の日本では無理な話である。

そしてある時、友人宅で初めて読んだマンガが『青い花』だった。一撃でアウトサイダーな世界にはまり込んでしまった紬は『マリア様がみてる』を全巻読破し、『神無月の巫女』をおそるおそる指の間から見るなどして、着実にそのスキルを高めていった。

そしてその才能が今、花開く。

「ハルヒ……お姉さま……」

「……は？」

紬は目を潤ませ、頬は薄紅色に上気している。新たな世界が開かれ、薔薇色のオーラで包まれていた。確実に世界は二人を祝福している。

――紬の中では。

????　#99

朝比奈みくるは、ある時空平面の七夕にキョンと二人で来るはずだった夜の公園にタイムリープした。
時空間でのカオスの縁から縁への平行宇宙を超えての超時空ジャンプだった。　長門有希のサポートがなければ、この時空間の孤島を訪れることはできなかっただろう。

すでに時間ベクトルが０になった空間はただ在るだけだった。すべてがフリーズドライしたように停止している。時系列の連続性を失った空間で動けるのはみくるだけだった。
そこには彼とわたしが『あった』。……その周りに人だかりが出来ている。
わたしは……

……えっと、わたしはわたし？

わたしはわたしだけのはず。

あれ？　わたしはわたしなんだからわたしはわたしだよね。

あれっ？あれ？？わたしだけのわたしのわたしはわたしなのよ。
わたしはわたし？

人の輪は、大勢の『朝比奈みくる』たちだった。

息が荒くなる。心臓の鼓動が不自然になっているのを感じる。目の前が薄暗くなってゆく……。

朝比奈みくるの一人が倒れた。

「――十八人目よ。だからあれほど平行時系列をいじるなと言っていたのに……」

ベンチに浅くこしかけ、溜息をつきながらこめかみをもんでいるのは大人版の朝比奈みくるだった。

「まぁ、未来の私が複数来ないだけましかな。ねぇ長門さん」

ベンチの脇に不吉な影のように立っている長門有希に話しかける。

「原因となる事象より、四次元を同心円球的に影響は拡大している。あなたが来るのは確率の問題。もしくは観測範囲の問題」

「……そうなの？」

「そう」

ふー、と息を吐きながら未来のみくるはベンチの背もたれに身を預ける。

「今回の原因は長門さんのバグではないのね？」

「……そう」

朝比奈は思い出す。長門有希が蓄積されたエラーにより、涼宮ハルヒの力を利用してＳＯＳ団メンバーの存在を書き換えてしまった事件を。あのときはキョンだけが記憶を残し、世界を変えた。

あの世界では、長門有希は朝倉涼子に保護されている内気な文芸

部員。朝比奈みくるはファンクラブが存在するほどの高嶺の花。涼宮ハルヒは力を持たないヒステリックな他校の女子高生。小泉一樹は涼宮ハルヒの尻に敷かれるボーイフレンド。
今回の世界では立場と記憶はそのままで、時間を1年の初めの頃に飛ばされてしまっている。それと環境が最悪に近い。キョンの死亡。涼宮ハルヒの自閉。時間平面の連鎖崩壊現象。

「もしかして、この時間平面をノーマライズするのには、条件が足りないだけなの？」
「……」
「あの子……、過去のわたしが条件を揃えてここを訪れないと双方の世界が成立しない。そうしないことには両方の時間平面のバランスが成立しないんだわ」
「そう」
「でも……、どうして？」
「合理的な説明はできない。異時空同位体との同期不能。情報統合思念体のへのアクセスに矛盾が発生するため、実行の許可が下りない」
「……」
「修復プログラム起動条件の鍵は二つ。涼宮ハルヒと平沢唯の情報正常化。時空改変者の捕捉」

朝比奈はそれを額を指先で支えながら聞いていた。不機嫌に応じる。

「で、いったいそれを誰にどうやって伝えればいいわけ？長門さんの同期もできない。私の連絡も届かない。キョン君もいない。それぞれの平行世界に情報を伝えることはできないわよ」
「問題ない。バックアップが稼働中」
「……一応ね、私たちにも出来ることがあるかもしれないの。協力

者にはそういった必要な情報は隠さないで教えて欲しいわね」

「善処する」

朝比奈は長門を睨み付けていたが、長門はぼんやりと虚空を見つめているだけだった。何か言ってやろうと思い口を開きかけたが思い直し、むっつりと押し黙まり、溜息を付いた。

■SOS　#03

平沢唯は、文芸部に入ってずっと疑問だった事を長門に尋ねてみた。

「長門先輩、文芸部って何をする所なんですか？」

長門有希は読んでいたハードカバーから顔を上げた。唯をじっと見つめると、三センチほど首をかしげる。

机の上に本を伏せ、おもむろに立ち上がると本棚に歩いて行き、分厚い書物を取り出してめくり始め、読み上げた。

「『文芸』――（１）〔ｌｉｔｅｒａｔｕｒｅ〕詩・小説・戯曲など、言語表現による芸術。文学。

（２）学問および芸術一般。学芸。

（３）書名（別項参照）。

『部活』――〔「部活動」の略〕野球部・美術部など、学生・生徒のクラブ活動」

長門は、滔々《とうとう》と淀みなくそれを読み上げた後、唯に顔を向けた。

唯を真剣な目で見つめると二センチほどうなずく。

辞書を閉じて本棚に戻し、パイプ椅子の指定席に戻ると、またハードカバーを開き、ページをめくった。

「お茶が入りました～」

朝比奈みくるが笑顔で二人に呼びかけた。

「わぁ、みくるちゃんありがとう」

「今日はお茶請けにとらやの羊羹（ようかん）を揃えてみました。デパートで和菓子フェアが開かれていたんです」
「ほんとだ！　すごい」
唯は目をきらきらさせながら、羊羹を切り分け口に運ぶ。
「おいしーっ！　みくるちゃん、その服かわいいね」
「え、そうですか？」
みくるの服装は日替わりで変わる。今日は胸が強調されたウェイトレスの衣装である。髪型はツインテールにして束ねている。
「ええっと、でも、涼宮さんじゃなくて私が選んだ物だし……。買いに行ったおみせでは、こんなものしか無くて……。でも、変なおみせで……」
みくるはもじもじしながら、顔を伏せると真っ赤になった。おそらく流通経路としてのインターネット通販を知らないのであろう。

「邪魔してるわよ」
文芸部の入り口で、内側から軽くノックしている人物がいた。
「あれ、和ちゃんだ？」
「唯じゃない。何してるの？」
その人物は、ショートカットに赤い眼鏡の唯の幼馴染、真鍋和であった。
「和ちゃんも座ってよ。みくるちゃんが買ってきた羊羹がすっごくおいしいんだよ」
「……遠慮しておくわ。今日は文芸部に生徒会から言伝があってきたんだけど、部長の長門さんは？」
「長門先輩はあの人だよ」
長門は本から顔を上げてこちらの方を見ていた。しかし、視線はこちらではなく入口に向かって投げかけられている。
その視線の先には、新緑のような微笑みを湛えた一人の少女が立っていた。
「和ちゃん、その人は？」

「生徒会書記の喜緑さんよ」
喜緑江美里はクスリと微笑み、会釈をした。
「初めまして平沢唯さん。あなたのお話は真鍋さんと長門さんからよく伺っています。よろしくね」
「あ、はい、よろしくおねがいします」
「真鍋さん。長門さんには私の方からお話をしますので、お茶でもいただいて待っていていただけますか」
「いいんですか？」
「ええ、ちょっと長くなるかもしれないから待っていてください」

喜緑江美里は長門の座っている席へと歩いて来た。その顔は穏やかな微笑みに包まれている。
「長門さん、久しぶりですね」
「……」
「朝倉さんが怒っていましたよ。　彼女、あなたのことを本当に心配しているんだから」
「……理解している」
「一応、あなたのプランで情報統合思念体へ問い合わせてみたわ。問題は多々ある様だけど、観測への影響を最小限に抑えて現状復旧を行うには、あなたの考案したプランが最適だと判断されたようです」
「そう」
「プランはあなたと朝比奈みくるで実行することが条件だったですね」
「そう」
「それと、これは些末なことなんだけど、この文芸部なんだけど……っ！」
喜緑がそれを口にした途端、長門から部室を覆い尽くすような緊迫したオーラが溢れ出す。オーラが空中で鬼の形相を形成している。

「廃部はさせない」
「わかっています！　怒らないで、落ち着いて！」
「……わかった」
喜緑は口を押さえてすこし笑った。
「文芸部存続のためには五人以上の部員が必要と言うことでしたけど、そこは情報操作を使って三人で良いことになりました」
「……」
「その代わりの条件と言ってはなんなんだけど、文芸部の会誌の発行をしてもらうことになりました」
「……？」
「これは情報統合思念体からの指示なの」
喜緑は鞄から、コピー紙が閉じられた薄い小冊子を取り出す。
「これが会誌ね。あなたたちも一度作ったはずだから分かるでしょ」
「なぜ？」
「あなたの演算に誤差があったようね。このまま平行宇宙を連結するとエラーが生じる。平行宇宙間の因果系を補完する必要があるってところかしら」
「……了解した」
「それじゃあ私は生徒会の後輩も待たせているので帰ります」
喜緑は薄く笑いくるりと背を向けた。

「真鍋さん帰りましょうか、って……なにをしてるんですか？」
そこにはフェンシングの様にフォークを構えている平沢唯と真鍋和がいた。
「和ちゃんのケチ！いいじゃないもう一口ぐらい！！」
「あのね唯。後一口と言っているけど、あんたがずっと横から食べたせいで私の分は後一口分しか残っていないじゃないの！」
唯と和のフォークがちゃりんちゃりんと空中戦を始める。それをあわあわと朝比奈みくるが仲裁にはいる。

「わわわ。ふたりともおちついてください。羊羹はもう一つ残っていますから」
二匹のケモノがぎょろりとみくるの方へ目を向ける。
「……唯。すっこんでなさい」
「やだよ。和ちゃんこそダイエットするから甘いものはもう食べないんでしょ。これ以上太ったら大変だよ？」
「自分がダイエット必要ないからって……あんた怒髪で突くわよ！」
「じょーとーだよ、和ちゃんなんかに負けないもん。べー」
「ぁあのあの、二人でわければ……」
ギンと二人はみくるを睨む。一拍おいた後に二人はみくるに飛びつき、もみくちゃのとっくみあいになった。
「やぁ、ちょっっ、あ、唯ちゃんそんなところ掴まないで！　あっ、うにゃぁアアッ、ののの和さん！？　そんなぁ、あっあ、やめてっ！！　や、やぁ、ゃめ、やめ、やめな……」
喜緑はそれをクスクスと笑いながら眺めているのだった。ある意味では世界は平和である。

□Ｋ－ｏｎ　#０３（前書き）

百合です。関係者各位の皆様、大変申し訳ございません　ｍ（＿）ｍ

□K－on　#03

「ちゃーす、ってあれ？　誰もいない」
田井中律が軽音部部室へ来たとき、ほかの仲間達は誰もいなかった。
「まぁ、別にいいけどね」
律はバックパックを肩から下ろして、机においた。椅子を引き寄せて腰掛けると、何とはなしに窓枠に肘をつき中庭を眺めていた。
5分ほどそうしていたが、誰も来る様子がない。

（久々に自主練でもするかな）

律は、音楽準備室に入ると、窓を閉めて音が外にもれないようにする。ブラウスの袖をめくり、ドラムスの前に座るとフットペダルを踏み込み、椅子の高さを調整した。電子メトロノームをセットして、ランプが見えるように前方の棚の上に配置する。

まずはスローテンポで緩やかにベースドラムとスネアを交互に叩く。メトロノームの点滅が変わると、クラッシュシンバルを追加して、テンポを上げる。

右手のタムタムを追加。テンポアップ。8ビートを刻む。

3分程続けた後にテンポアップ。限界近い速度でキープする。ほとんど連打に近い中でフレーズを表現していた。澪に先走り過ぎると注意をされていたけれども律は高速プレイが一番好きだった。己の限界速度でプレイを続ける。リズムのドライブ感で首の後ろがちりちりする感覚を感じはじめる。

そのとき、準備室の角から拍手する音が聞こえた。振り返ると、女子が驚いた表情で拍手をしていた。
律はクラッシュシンバルを手で押さえて、音を止める。
「すごいね。速いのに全然、音に乱れがない」
その女子は、セミロングの清潔そうな髪をゆらしている。細い足に白いハイソックスが目に付く。
「んー、それほどでもないけどさ」
律は照れ隠しで笑いながら受け答える。
部屋の中が暑い。律は部屋の窓を開けて、スポーツタオルで額の汗を拭った。５００ミリリットルのペットボトルのフタを開けると一口飲む。
最上級の笑顔で部屋にいる女子に尋ねる。
「ところで入部希望かい！？」
「いいえ、この部に友達がいるの」
「ふーん、ムギちゃん？」
「涼宮ハルヒです」
「……あー、もしかして朝倉涼子さん？」
「！　私の事知ってるの？」
律は、『涼宮ハルヒは旧校舎に取り憑いた幽霊で、宇宙人と交信する友達がいる』という秋山澪の話していたトンデモな話を思い出した。澪の恐がりの性格は小学生の頃からずっと変わらない。その話にしても流し聞きである。
とはいえ、携帯の電話口でさめざめと泣きながらそんなことを話されると、さすがに印象には残る。朝倉涼子はその話の中に出てい

たような気がした。

考え込みながらも、とりあえず朝倉に席を勧める。

「まぁまぁ座ってよ。ムギちゃんきたらミルクティーでも入れてもらうからさ」

朝倉は涼やかに微笑みながら応じる。

「お構いなく。私はハルヒの忘れたノートを届けに来ただけですから」

律はアヒルのように口をとがらせて、ぶうぶう文句を言った。

「いーじゃん座ってよ、一人で暇だったんだよ」

「……じゃあ、ちょっとだけお邪魔します」

朝倉は渋々、椅子に座った。

――三十分後。

「――――でさ、変なところで真面目なわけよハルヒは。で、いったん始めたことは中途半端でやめられないから、始める事はいい加減に見えてわりあい厳選してるのよね。一緒に調べている私も気を遣うのよ」

「なんとなく分かるよ、それ」

「私の同りょう……友達で長門さんっているんだけどさ、堅物だし、頑固だし、融通効かないし、いつも怒ってばっかりなののよね。長門さんがまた怒ってるって上司の喜緑さん……喜緑さんは先輩なんだけどね。が言ってて。それでねー――」

（ストレス溜まってそうだなー）

朝倉は初め、ぽつぽつと律の言葉に答えているだけだったが、律が気を利かせて話を促してやると爆発した。ほとんど二十分近くノンストップで話し続けている。涼宮ハルヒの事、そして友達との人

間関係。彼女も他人に気を遣い続けているタイプのようだ。
何となく律は共感してしまう。
「分かるような気がするな。私にも澪ってバカな幼馴染がいるんだけどさ、ビビリのくせに真面目すぎるんだよね。怖いならほっとけばいいのに」
「澪って、澪ちゃん？　ハルヒがギター持って帰ってきた夜に言ってたわね。チューニングのやり方を澪ちゃんに教えてもらったって。その日、ハルヒはギターに添い寝してたのよ」
朝倉は思い出して目を細めてクスクスと笑う。
「ハルヒが、こんな風に誰かの為に一生懸命になっているのって初めてだな。張り切っているように見えて、内面ではいつもしょんぼりしてるんだよ。わりと精神的に脆いのよね、あの子」
「朝倉さん」
「涼子でいいよ」
「涼子はさ、ハルヒとはつきあい長いの？」
「……そうね。ハルヒとは中学一年の頃からずっとご近所つきあいしているから三年間になるかな」
朝倉はしみじみと答える。律はニヤニヤしながら聞いてみる。
「もしかしてさー、涼子にとってハルヒは大切な人？」
朝倉はきょとんと一瞬、呆けた後で真顔になる。
「まぁそうだけど、多分あなたが考えている意味とは違うわね。第一、同性同士じゃない」
「いやいやいやいや、語る口調が普通じゃなかったですもん。りっ

ちゃん、ＡＢ型だから分かっちゃうもんね」

律は口を押さえて意地悪そうに笑う。朝倉は居心地悪そうに視線をさ迷わせる。

その時、軽音部室の入口が開き、涼宮ハルヒ、秋山澪、琴吹紬の三者が入ってきた。

「あれ？　涼子、こんなところでなにしてんのよ？」
「ハルヒ。あなた教室に数学のノート忘れてたみたいね」
「ん、ありがと。お茶ぐらい飲んでいけば涼子？　ムギちゃんお茶を入れて。まえのハーブティーが良かったわね」
「はーい」

ハルヒはてきぱきと指示を出すと、奥の『団長』と書かれた三角錐が置かれた机の席に座った。
澪はベースを壁際に降ろすと、気まずそうに立ち尽くしている。律に助けを求めるような視線を向けると、近づいて小声で話しかけた。

「おい律。なんで彼女がここにいるんだよ」
「んにゃ？　別に良いんじゃない？　悪い人じゃないよ」
「そう言う事じゃないんだよ！　まえも携帯で話したろ……」
「みなさんお茶が入りましたー」

紬はティーカップを並べた盆とティーポットを両手で捧げ持ち、軽音部室内のメンバーに注いで回る。最後に自分の分を注ぎ終えると座席に着いた。

「……ムギちゃん。暑いわ」

「えっ？　お湯の温度には気を付けたつもりだったのですが、熱いですか？」
「ティーは七十度が適温……じゃなくって！　なんでそんなに近いのよ！」

紬はハルヒの左方十センチほどの位置に椅子を陣取っている。左手を頬にあて、うっとりとして答える。

「気を付けたつもりですが……次からはもっと気を引き締めるようにします、ハルヒお姉様」
「……」
「……」
「……」

紬はうっとりとした表情。
ハルヒはめんどくさそうな顔をしている。
澪は気の毒そうな目でそれを見ている。
朝倉は表情が完璧に凍り付いている。
律は好奇心むき出しな目でそれら様子を眺めていた。

それぞれの思惑を乗せて、桜が丘高校軽音部の放課後は過ぎてゆくのであった。

■ＳＯＳ　＃０４（前書き）

古泉ルートです。多少、話が重たくなりますが、お付き合い頂けますと幸いです。
鶴屋さんと森さんにはこちらでご出演いただきました。
長くなりすぎて、前後編にわけたのはここだけの話です…　ｏｒｚ

■SOS　#04

病院特有の消毒液の刺激臭が鼻につく。白色のリノリウムが鈍く光を跳ね返している。古泉一樹は残響音を残しながら一人、回廊を歩いていた。

ここは表だっては古泉の叔父が経営しているとなっているが、実は『機関』が所有する総合病院である。古泉が現在いる階層は、高額な入院費の代償にアメニティの高い、ホテルのような病室を提供する、いわゆるＶＩＰ病棟であった。

病室の前に掛ったプレートのナンバーを眺めながら歩き、目的のナンバーの病室の前で立ち止まった。その場所は病棟の中では日陰に当たる、廊下は空の光のみが空間を満たしている。

しばらくの間、扉を上目使いに考えるように立ち止まっていたが、あきらめるように頭を振り、微笑を作り直すと扉をノックした。

扉の向こうから返事は無い。古泉はドアノブを押し開いた。

部屋の中は昼間なのに仄暗い。カーテンが閉め切られているためだろう。窓は開いているらしく、時折ふわりと光の束が動いていた。

その病室の主は、古泉が部屋に侵入しても身動ぎ一つせずベッドの上で上半身を起こして座っていた。その姿はシルエットしか見えない。

古泉は窓際まで歩いて行き、カーテンを引いた。初夏のまぶしい光が病室に溢れる。涼風のような爽やかな笑みで病室の主に語りかける。

「お久しぶりです。以前訪れた時は曇り空でしたが、今日は晴天ですね。何よりの事です」

病室の主は、痛々しいほど薄い肩にブルーの患者服を身に纏った少女であった。特徴的なのは美しく長い髪だろう。腰よりも長い髪はレース編みの模様をベットの上に作り出している。表情は前髪に隠れて読み取ることができない。

古泉は病室に付属している折りたたみ椅子を開くと腰掛け、足を組んだ。やれやれというように肩をすくめると、少女に話しかけた。

「やっぱり今日もお話をしていただけないんですね。僕は一人で話すことは得意分野ではないので、できればお喋りの相手をしていただきたいのですが」

「……」

「まぁ詮無きことです。僕が鬱陶しいのであれば言ってください」

「……」

「僕はあなたを待ち続けています」

「……」

「僕というと語弊があるかもしれませんね。僕個人だけではなく、機関や彼女たち。彼女たちの背後関係の組織。それらがみんなあなたの帰還を待ち望んでいるはずです。無論、僕個人もそれをクリスマスを待つ子供のように熱望しているのですがね」

「……」

「戻ってきてください。僕たちは……」

古泉は少女の表情を窺い見た。

少女は口を結び、茫洋と空間を見つめているだけだった。

その目は純水よりも透き通っており、なんの感情も感じ取れない。

かつての恒星を押し込めた様な輝きも、地獄の劫火の如き苛烈な意志も消え去ってしまっている。

（……ッ！）

古泉は不意に涙がこぼれた。少女に気付かれないように手の甲で拭う。息が詰まりそうになる。ひとつ息を吐き、感情を押し殺して何とか言葉をつないだ。

「僕達は……いつまで待ち続けなければいけないんでしょうか？……本当に、これがあなたが望んだ物語の結末なんですか？

……涼宮さん」

意志を無くしてしまった少女はなにも答えなかった。

病院のロビーはホワイトノイズのような無味乾燥な喧噪で溢れていた。付けっぱなしのＴＶから通販番組の意味もなく賑やかな声が流れてくる。

古泉はうつむきがちに床をにらみながら、据え付けのベンチに腰掛けていた。その表情は焦燥と疲労が滲んでいる。

「古泉」

古泉が顔を上げると、フォーマルなビジネススーツに身を包んだ、二十代半ば程の女性が立っていた。

「……森さん」

「どうぞ」

森園生は柔らかく微笑み、両手に持っていた缶コーヒーの片方を差し出す。古泉がコーヒーを受け取ると、森は隣へ腰掛けた。

「少しあせりすぎじゃないでしょうか古泉？　我々が時間が無いことは分かっていますが、あなた一人で抱え込もうとするのはおやめなさい」

「……ありがとうございます。ですが、僕は、事前に異常を察知していながら彼女を……涼宮ハルヒを、僕は守ることができなかった。それどころか友人を死に追いやってしまった。……そんな僕が許されていいのでしょうか？」

一人で暗闇の中に佇む少女。その姿がフラッシュバックする。頭を振り記憶を追い出す。

許されるはずがないと独りごちると古泉は沈黙した。

森は溜息をひとつ付くと古泉にゆっくりと、しかし刺すようにはっきりと問いかける。

「古泉。あなたはその程度の認識で涼宮ハルヒに関わろうと思ったのですか？　彼女に関わる以上、多くの人の人生を変えてしまう可能性がある。それぐらいの事は分かっていたのでしょう？　あなたは自分自身の手を汚すことなく傍観者の一人として生きていけると思っていたのですか？」

「……分かって、いますよ」

森の表情が一気に険しくなる。

「きちんとと答えなさい古泉。分かっているなら逃げようとするのは卑怯です。今のあなたは自分の弱さへの言い訳に彼女を利用しているだけです」

「……」

古泉は視線を背けて、俯いているだけだった。森は悲しそうに首を振ると、立ち上がった。

「……そろそろ時間ですね。行きましょうか。鶴屋家の次期頭首があなたにお会いしたいのだそうです」

「……なぜ僕に？」

「朝比奈みくるから、あなた宛に伝言があるとの事です」

ふと思い出す。『機関』の目的は涼宮ハルヒの観察と護衛であり、彼女がこうなってしまった以上、学校内でフォローする活動員は必要無い。古泉も現状は他の高校の学生として時折、病院でハルヒへ面会するだけである。

朝比奈みくるとも、この世界が『再構築』されてからは頻繁には会っていない。涼宮ハルヒが北校文芸部にいない以上、みくると接触する理由は別にないはずだ。

（……どういうつもりなんでしょう？）

考えたが別段、理由は思いつかなかった。考えることをやめた古泉は歩き始める。

■ＳＯＳ　＃０４（後書き）

できれば、一週間に一話のペースで出したいなぁ…。あくまで目標ですが。

□K－on　#04

涼宮ハルヒは上機嫌で旧部活棟の廊下を歩いていた。その足取りはスキップでもしてるように軽い。

ハルヒは軽音部の部室である音楽室の前に仁王立ちで立ち止まった。ニヤニヤ顔で扉をにらみ付けると、勢いを溜めるように深呼吸をして、一気に吐き出すように扉を開け放つ。そして高々と宣言する。

「なーにだらだらしてんのよ！　合宿いくわよ！　合宿！！　ムギちゃん場所よろしくっ！　貧すれば鈍するのよ、朝から晩まで練習三昧！　あんた達、覚悟しなさい！！！」

軽音部室の中でティーセットを囲んでいた田井中律、琴吹紬、秋山澪の三人は、悪い魔法使いに時を止められたが如く硬直した。

澪はふと思う。（あれ？　もしかしてこれ私のセリフじゃ……）

ハルヒはいい笑顔で機関銃のように、まくし立てる。

「日程は明後日から三日間！　明日は試験休みだから準備に当てるわよ！　駅前に十四時集合。一応計画としては海辺のペンションを計画してるわ！　リフレッシュで泳いだり、スイカ割りしたり、肝試ししたりするから、新しい水着も準備しておいた方がいいわね！

みんなでカレーも作るわよ。あたし、アウトドアではバーベキューよりはカレー派なのよね。夜のためにモノポリーとかボードゲームも用意しておいた方が良いわね！いっとくけどいつものとは違うんだからね！　合宿よ！！　理解できた？　ＯＶＥＲ？」

澪は押さえきれない頭痛と戦いながらも、ひとまず抗弁を試みる事にした。

「あのなハルヒ。いったいそれのどこが練習のための合宿なんだよ！」

律はそれに口をはさむ。

「えー？　いいんじゃね？　楽しそうじゃん」

「律！！　……そうだ、ムギはどう思う？」

すでに宙に視線を泳がせて妄想モードに入っていた紬は、澪の名指しで現実に戻る。

「……とぉってもいいと思います」

ほおを赤らめてトロンとした目で答えると、また空想の世界へと旅立って行った。

澪は頭を抱える。

（もうダメだ。この部屋、いやこの世界には常識が通じる人間がいない！　……いや……もしかして、私がおかしくなっているのかな？　えっ……私……変な事言ってるの……？）

秋山澪の絶望は深い。

その日の夜。

ハルヒの部屋を訪れた朝倉涼子はシンクの中に食器が並べられているのを見つけた。

「あら……だめじゃない。洗い物がたまってるわよ」
「おいといて。今から洗うつもりだったから」

ハルヒは机に向かい、ギターで音を取りながら、ちょこちょこと
ノートに書き込み、楽譜を起こしているようである。朝倉はその熱
心に取り組んでいる様子を眺めてほほえましく思った。

「片付けておくわね」
「ん」

朝倉は、お湯をシンクに張って食器を次々と沈めてゆく。スポン
ジに食器用洗剤を含ませて泡立てる。十分に泡立てたところで食器
を手に取り、手際よく泡をこすりつけてゆく。
振り向いて、肩越しにハルヒの様子を眺めてみると、ハルヒはま
だ作曲活動を続けているようだ。その背中からは、嬉しそうな空気
がにじみ出ている。

「なんか、ずいぶんと嬉しそうね」
「んー？」

ハルヒはシャーペンで頭をかきながら、口をへの字に曲げて朝倉
に顔を向けた。
朝倉には分かるのだが、彼女は図星を付かれた時には子供が拗ね
たような、そんな表情をする。
ハルヒは持っていたシャーペンを指でぐるぐる回しながらうけ答
える。

「別に。そんなことないわよ」
「最近、音楽の練習がんばってるんじゃない？」
「……まーね」

「いいと思うな。あなたがそんなに楽しそうだと、わたしまで嬉しくなってくるわ」
「そんなんじゃぁないわよ」

ハルヒは仏頂面でシャーペンを握り直すと、また楽譜起こしに取りかかる。ノートに向かって何かしら書き付けながら朝倉に話しかける。

「そういえばさ涼子。あたし、明後日から軽音部の合宿行くことになったから」
「へぇ、そうなの。うらやましいな」
「ムギちゃんがね、海辺にペンション持っていてさ、そこにスタジオもついてるんだって」
「へぇ」
「でね、海も近いし、部屋も広いし、露天風呂も付いているのよ」
「……へぇ」
「部屋も沢山あるのよ。でもなぜか、あたしとムギちゃんだけ相部屋なんだけどね」

朝倉は持っていたスポンジを取り落とした。
振り返ったその表情にはスダレのような影が掛っている。

「……ねぇハルヒ。わたしも一緒に合宿に行っていいかな？」
「涼子？　あなたは部外者じゃない」
「いやでも！　あの子は危険因子過ぎるというか……そうだ！　マネージャーとしてならいいよね？」
「ダメよ！　合宿は遊びじゃないのよ」
「……そんな……」

次の日、澪と律の会話。

「はやくしろよ、律！」
「ぁー、ねむいぃ。ゆするな澪……頭痛い」
「？　クマがすごいけど夜遅くまでゲームでもしてた？」
「んー、いや。夜中に涼子から電話あってさ、ずうっとハルヒと宇宙の話を聞かされた」
「……大変だね」
「三角関係ですよ奥さん。ウケケケ。ってかさ、涼子にしろ誰かさんにしろ、なんでこんな事ばっかわたしに電話してくるのかな」
「？」
（こいつ……自覚ないし）「ほら澪、ムギとハルヒも待ってるし、さっさといくぜ」

■ＳＯＳ　＃０５（前書き）

前回の古泉編の後半です。古泉が好きとか、鶴屋さんを愛してしまっている人はＧＯ　ＢＡＣＫかもしれません。いろんな意味で。
全体の物語としてはこのあたりで折り返しですね。

■SOS　#05

鶴屋より呼び出された古泉は、病院から鶴屋邸に向かった。長い塀が続く私道を抜けた先に、落ち着いた門構えがそびえている。
車より降りた古泉は引き戸の脇にあったインターフォンを押して、来訪を告げる。

応対する鶴屋家のお手伝いに導かれて長い廊下を抜ける。屋敷の奥にある離れの座敷にて古泉は障子を開いた。

「鶴屋さん」
「やっ！　悪いねっ。呼び出しちゃってさっ。あははっ」
「なんのご用でしょうか？」
「ん～～ふふっ、なんだと思う？」

着流しに近い和装の上に甚平を羽織るという格好の鶴屋は、文机の前でマンガを読んでいたらしい。古泉を見るとチェシャ猫のようにいたずらっぽく笑った。

「いやね、ほんっとつまんない話なんだけどさっ。あんたんところの機関が一枚噛んでいるというんで、ちょっちご足労願った訳さっ」
「ほう、なんでしょう」

古泉は訳知り顔で尋ねる。鶴屋はいたずらっ子の笑顔のままで古泉の元に近づいてくる。

次の瞬間、鶴屋は古泉の手首を逆手に取った。手首を捻り極める。身体の重心を崩す。くるぶしを蹴り上げる。

それらの動作を一呼吸の間に納める。流れる様な動作は練達した古武術のものであった。気がづいたときには古泉は投げられていた。

「……あたしだって気づいてんだよ。調子に乗るなよ色男」

鶴屋の目の色が凄残なものに変わっている。受け身を取れない姿勢で床の間に叩き付けられた古泉は肺の根から息を絞り出す。鶴屋は暗い瞳で睨み、腕をねじ上げて立ち上がらせようとする。

「立て」

「カッ……はッ……」

「あはっはははははっ！！　さぁてなにから聞けばいいのかなぁ？　みくるがさぁ、いつも悩んでるんだよねぇ！　あの子が普通じゃないことはあたしも知っているさ。でもさぁ、今回はなんか裏がありそうだってピーンときちゃってね。特別にちょこっとそこらへん調べてみちゃったのさ」

「……」

「んー？　ねぇ、気にならない？　気にならないのかなぁ！　もっと良い反応すると思ってたんだけどなぁ！！」

鶴屋は古泉の腕を掴むと引き込み、足元を足刀（そくとう）で払った。つんのめる形で受け身も取れずに叩き落とされる。

「ねぇ、何をしてるのかなっ？　君は」

「……」

「おまえがみくるを傷つけているのは分かってるんだよ！　黙っていないで答えろ！！！」

起き上がろうとする古泉の頭や脇腹を何度も蹴り込む。一撃一撃が重い。その攻撃に慈悲は無かった。

古泉は口から血を流しながらも、何とか鶴屋の蹴りを抱きしめるように受け止める。血の塊を吐き出しながら言い返す。

「……あなたが朝比奈みくるを守っているように僕にも守らないといけないものがあるんですよ」

「……ははっ、あんたの理由なんか関係ないさね。私は私の納得いく答えを求めているだけさ」

「僕は……」

何のために戦っているのだろう？

この世界を救うため？

犯した罪の贖罪のため？

くだらない。

この世界はもう壊れている。

彼女が壊してしまったから。

僕は……何のために……？

「っく……。ぁはははははっはははははっ」

古泉は狂ったように笑い出す。

血を吐き出しながらひとしきり哄笑すると、ぜぇぜぇと息を吐き出して、のどから声を絞り出す。

「……考えてみれば単純なことでした。僕はもうこの世界を守るべき理由など無いのです。この世界の神はもう僕らを必要としていませんから」

「……頭大丈夫なのあんた」

「僕が戦う理由。それは……」

自分の持てる全ての力で、
全てを利用して、
全てを欺いて、
全てを壊して、
全てを奪い尽して、
この狂った世界の中から壊れてしまった彼女を、救い出す。

それだけだ。

導き出された結論に納得した古泉は、鶴屋に顔を向ける。なるべくフレンドリーに語りかける。

「……ねぇ鶴屋さん」
「……なによ」
「あなたが求めていることに、僕は全面的に協力しても構いません」
「へ？」
「機関とあなたの目的は一致します。離れてしまってはいますが、朝比奈みくると僕は旧知の仲でしてね。彼女を救えるのはおそらく、僕だけだ」
「……」
「それとこれは言いづらいのですが……裾を押さえた方がよろしいのではないですか？」
「は？」
古泉は気の毒そうに視線をそらす。
「帯が解けてしまってますよ」
鶴屋は下を向き、自分の身なりを確認した。着流しの帯が解けており腰に引っかかっているだけになってしまっている。着物がはだけてしまい、おへそや下着などが覗いている。スマートでありながら出るところが出た肢体が半ば白日の下に晒されていた。

「??　……ぅひゃあぁっっ?!!!　……うっ、うにぃぃ〜〜〜〜〜〜〜〜!」

目にいっぱいの涙をためた真っ赤な鶴屋はフルスイングで拳を振るう。

数日後。

北高文芸部の扉がガラリと開け放たれた。元気百%な笑顔で鶴屋は呼びかける。

「やっ!　みくる〜〜!　文芸部にさっ、どうしても入りたいって一年がいてねっ、つれてきたのさ!!」

鶴屋の影から一人の男子生徒が現れる。微風のような笑みと共に古泉一樹は立っている。

「お久しぶりです。恥ずかしながら帰ってきました」

きょとんとした朝比奈みくるは、はじめ、古泉の姿を見つめていたが、ふらりと立ち上がると顔をくしゃくしゃにして泣き出してしまった。

「古泉くん……はうっ……よかったぁ……、もうこの世界ではあえないのかなってずっと思っていました」

「古泉一樹」

長門有希は手元にある凶器に使えそうな古書から顔を上げて、顔だけを古泉の方へ向けている。首をすくめて古泉は切り出す。

「長門さんは大丈夫でしたか？」

「へいき」

それだけを言うと長門は興味を無くした様に読書へ戻っていった。

「んっ？　誰なのかな？　みくるちゃん」

平沢唯はお茶請けの最中を口の中でむぐむぐと咀嚼しながらみくるに問う。

「唯ちゃん。古泉くんはね……」

「平沢唯さん。お名前はかねがね伺っておりました」

「ほぇ？」

「僕は朝比奈さんの古い知り合いですよ。文芸部とはいささか縁が深くて以前も活動していたのですが、所用がありまして離れざるを得ませんでしてね。またこうして戻ってまいりました。文芸部に新入部員がいるということを朝比奈さんより伺っていたのですよ。」

「ほぇー、そうなんだ。ふーん、とってもハンサムさんだね！　みくるちゃんの彼氏？」

「ゆっ、唯ちゃん！？」

古泉はクスリと笑い、応じる。

「そのようなものです」

「こここっ古泉くん！！！！！？」

各々で勝手に活動してる文芸部の面々、ニコニコと眺めながらも古泉は思考の淵へと入ってゆく。

以前の世界と同じようでありながら、原理が全く違ってしまって

いるこの世界。広域宇宙知性体の人型端末。未来からの観測者。紛れ込んだ異世界の不協和音の少女。現れたピースはとてもちぐはぐで、一見すると意味など無い。

しかし、失われた彼女を取り戻す鍵は、この部室の中に隠されている。

残された時間は限られている。見つけ出すには全てを壊し、全てを敵に回さなくてはならないかもしれない。

だが、古泉の決意は変わらない。

「……それなら僕は悪で構わない」

□K－on　#05（前書き）

軽音部合宿編後編です。そろそろラストスパート。

□K－on　#05

「ちょっとちょっと！　ストップ！　律ちゃん！？　またドラムがリズムキープが全然できてないわ！　打ち込みが足りないからずれるのよ。もう一回頭っから十回！」
「……なぁハルヒ。今何時だと思う？」
「午前二時でしょ。関係ないわよ！　さっさと始めなさい！！」
「律も疲れてるし、そろそろ今日のところは終わりにしないか？　ハルヒ」
「あんたもよ澪ちゃん。ベースはまともだけど遊びが全然無いじゃない！　外さないように気をつけるのは当たり前よ、そこからどう魅せるかをいい加減学びなさい！」
「……分かったよ」

涼宮ハルヒは鬼教官であった。合宿一日目、確かに夕食の時間までは和やかな合宿だった。しかし、夜にスタジオで音合わせをしてその演奏を耳にした途端、ハルヒは激怒した。

「なによこれ！！　リズムはてんでばらばらだしメロディのエッジもへたってるじゃない！　これでメジャーを目指そうなんてどの口が言うのよ！　今から特訓よ！！」

秋山澪はメジャーデビューとか言ってたのはテメエだろうよと思いつつも、あえて突っ込みを入れるのはやめておいた。この軽音部はあまりにもユルすぎる。ちょっとはカンフル剤も必要だろうと思ってのことだった。
それがこのような地獄絵図を生み出すとは、みじんも考えていなかった自分を呪うしかない。

（それにしても、この子はすごい……）

ハルヒの指摘はやかましいが、正確に演奏を聞き分けた上で全体のバランスを調整していることが分かる。それにハルヒ自身の演奏にしても、ただフレーズを演奏するのではなく、フレキシブルに速度やアームを変えて、最上の演奏へと最適化しようとしてくるのだ。

澪は楽しくなってきていた。このまま練習を積めば確実に高いレベルへいける。もしかしたら本当にメジャーで通用するバンドができあがるかもしれない。

そのとき田井中律は、天を仰ぎ、お花畑をこえて川岸でおととしに亡くなったひいおじいちゃんとばったり再会していた。

そんなこんなであっという間に三日間の合宿は過ぎていった。最終日の夜は、海辺でキャンプファイヤーをして過ごす予定であった。ハルヒはまだ不満げな様子だったが、「まぁいいわ。この夏休み中に叩き直してやるから覚悟はしておきなさい」とだけ言い、しぶしぶ納得した。

そして今のハルヒはなにやら楽しげに紬と一緒に、たきぎを運んでいる。

澪は、なんだかんだでキャンプファイヤーの準備をしているハルヒと紬の姿を見ていると、いろいろと無茶なところはあったけど合宿に来て良かったと思うのだった。

「？」

澪はその視線の端でこそこそと隠れながら移動している律の姿を

見つけた。近くまで寄っていって話しかける。
「何やってるんだよ律」
「うわ！！　びっくりしたー。なんだよ澪か……」
「？　なにその袋？」
律は両手にスーパーの大きなビニール袋をぶら下げている。澪が指摘すると不敵にニヤリと笑った。
「清く正しい女子高生が合宿に来て、呑まないなんてありえないだろ」
律は袋を開いて澪に内容を見せつける。袋の中をのぞいてみると色とりどりのチューハイ缶が詰め込まれていた。澪は眉間を押さえる。
「この馬鹿律、何を考えてるんだ！　ばれたら一発で部活動停止だぞ！！」
「ばれなきゃいいんだよ！　いいだろちょっとぐらい？」
「いっとくけど私は飲まないからな」
「いいもんね、おまえにゃやらん」
澪が噛みつくようににらみ付けると、律はするりと逃げるようにハルヒと紬の元へ走って行ってしまった。この後の展開が予想できてしまった澪は顔を押さえ深々と一つ溜息を付いた。
宴もたけなわで順調に進み、田井中律は見事に潰れた。
律は豪快ないびきを立てて砂浜の上に仰向けに倒れている。その

周囲には十個ほどの空き缶が転がっていた。さんざん澪にからみ酒をやらかした上での所業であった。
澪はこのまま介錯でとどめを刺してやろうかとも思ったが、さすがにアシが付くので考え直した。それは我ながら計画性がなさ過ぎると反省する。
澪は律の周りに散らかっている空き缶を拾って、ビニール袋に放り込む。律の顔を見ると幸せそうで腹が立つのでそちら側をあまり見ないようにした。

紬とハルヒの様子をうかがった。紬は巨峰チューハイ一本半を飲んだところでダウンしてしまっている。ハルヒの隣でほほ笑みながらチューハイを飲んでいたのだが突然、ぱたんと後ろに倒れてそのまま寝てしまった。今はハルヒに膝枕をしてもらいすやすやと眠っている。

驚異的なのはハルヒであった。律と同程度の酒量は飲んでいるはずなのだが、まったく顔色すらも変えていないのである。むしろ普段の言動よりもおとなしくなっているような感すらある。
ハルヒはひざ枕をしてやっている紬の頭を優しく撫でつつ、澪に話しかける。
「妹がいるとこんな感じなのかな？　ムギちゃんもお姉さんが欲しいみたいだし」
「え……」
はじめはハルヒの、のろけなのでは思ったが、堂々とした態度を見てる限りその様子はない。澪はおそるおそる聞いてみる。
「ねっ、ねえハルヒ。ハルヒはムギちゃんと相部屋だけど二人で何やってるの？」
「なにって何よ？」
ハルヒに問い返されて澪はどぎまぎしてしまう。
「や、いや、あのね、ふたりは仲が良いみたいだし、ちょっとふた

りで何やってるのかなぁって気になってたりとか、その……」
後半はほとんど小声であった。
「別に。オセロやったり、部屋の片付けやったりするだけよ」
澪はふと思う。
（もしかして、この子。ムギちゃんより純真なのかな……）
澪は紬をかわいそうだと思った。ほんの少しだけ。

澪はふと気づいた。あたりはまったくの静寂の闇であり、焚火を囲む二人以外は誰も存在しない。潮騒のみがあたりには満ちている。
焚火が照らすハルヒの顔を見つめていると澪の中である思いが膨らんだ。暗闇の中からその考えは刺すように飛び出してきた。必死で否定しようとすればするほど大きくなっていく。

バカバカしいとは分かっていたが、澪はハルヒに問いかけた。
「ねぇハルヒ。あなたは……誰なの？」
ハルヒは顔を上げた。
「はぁ？　澪ちゃん、何言ってるの。お酒飲んでいないのに酔っぱらってるの？」
ハルヒはクスクスとほほ笑む。その表情は、焚火の揺らめきを受けてオレンジ色に映える。
澪はその顔を見ながら思い出そうとする。頭の中で警告音が鳴り響く。何かが違う。何かがおかしい。足元がゆっくりとかたむいていくように感じた。
「……澪ちゃん？」
澪は一気に今までの思いをぶつける。
「なんかさ、おかしいんだよね。いつものハルヒのいる場所に違うまったく知らない誰かがいるような感じがするんだよ。そんなはずがないよね。そんなはずはないのに……」
澪は、ははと力なく笑った。ハルヒはそんな澪の様子を真剣に見つめて言った。

「バカじゃないの？　そんなはずないでしょ」
澪には、ハルヒはそうは言っているが、心なしかいつもよりも弱々しく見えた。ハルヒの強い視線を外すように答える。
「……そう……だよね。仲間だもんね」
「……」
「……ごめん」
澪は膝を両手で強く握り締める。最低の気分だった。これではハルヒを傷つけただけだ。なんでこんな事を言ってしまったのだろうと深く後悔した。
焚火の中で大きな木が一つはぜた。二人は深く黙り込んだままだった。

「うっ！！」
律が突然跳ね起きた。急に立ち上がり波打ち際に走ってゆく。
「まったくもう、ほんとにバカなんだから……」
澪は立ち上がり、律のあとについていった。内心、ハルヒとの気まずい沈黙を破ってくれたことを律に感謝した。波打ち際でえずいている律の背中をさすってやる。
「もうお開きにしない？」
ハルヒは澪に背を向けたままいった。
「そうだね」
澪は答える。
軽音部の合宿最終日はそうして終えた。

次の日、三人が起きた後もなぜかハルヒだけが枕に突っ伏して起きようとしなかった。
「おーい、ハルヒーおきろー」
律は隣にあった枕をつかんでばしばしハルヒをたたく。

「やめて！！　うっ……ごめんおねがいだからたたかないで……」
「？　ムギちゃん何かした？」
律は振り返り、同室だった紬に問いかける。
「えっ！　いえ、私は何もできなかったのですが」
「ムギちゃんじゃないのか。なんでだろ？」
「……」
涼宮ハルヒの普段の様子からはありえないほど、弱々しい態度でつぶやくのであった。
「あたし……、今後一生お酒なんか飲まない……」

Ｋ－ｏｎ番外　中野梓の憂鬱（前書き）

オー〇ナイトニッポンのノリです。まぁ但し書きはいらない気もしますが……。

Ｋ－ｏｎ番外　中野梓の憂鬱

［タイトルコール：エコーｉｎ］
ぶち切れ！！　あず☆にゃんの断罪コ～ナ～（はぁと

わー、ドンドンぱふぱふ。

はーい、というわけで本編ではまったく出番のないわたくし、中野梓がパーソナリティをつとめさせていただくこのコーナー。本編でヘマをやらかした先輩方を、あずにゃんこと中野梓が一刀両断に斬って捨てるという斬新かつステキな発想から生まれましたー！　（ＢＧ：歓声）

私怨なんかじゃない！　……私怨なんかじゃありませんよぅ、ふふふ。やだなぁもう。わたしこうみえても結構忙しいんですよ？　たとえば……ねぇ？　（苦笑）

（沈黙）

……黙らないでくださいよ！　もう、スタッフさんがいじめるんですよ！　それじゃ、わたしはドラクエですれ違い通信探して町を歩き回ったり、ポケモンでレベル上げ作業で無駄に忙しいみたいじゃないですか！　違うもん！　……うっ……ぐすっ
……ぇ、はい、進行遅れるのでコーナー進めますね。……す

みません

お便りが来ています！　ラジオネーム『ほねっこ大好き』さんからのお便り！　（じゃじゃん！！）

『え？　なにこれ？　主人公、部室でお茶飲んで、菓子食ってるだけじゃん。存在意義無くない？？』

……ｗ　あー、唯先輩ですねーｗ　いいところをついてます。今回はわたし以上に存在感薄いんじゃないですかね彼女ｗ
まぁ仕方ないんじゃないですかね、長門先輩やみくる先輩が頑張って盛り立てようとしてるみたいですけど、異色ばかりのＳＯＳルートの中では、いかんせんキャラクターが弱いというか、モチベーションがゼロですからね。全員戦闘用に備えているあの世界で唯先輩に活躍を求めるのは酷かもしれません。……とはいえ今後はメインに据えるつもりらしいですが……（ボソッ）しねばいいのに

続いてまいります。って、え……あれやらないとダメなんですか？
えと、うーん……

にゃんにゃん！　あずにゃん！　あずにゃんにゃん！　（／／／）

（沈黙）

……続けます。ラジオネーム『炎の浪人生』さんからのお便り！（じゃじゃん！！）

『たくわん出過ぎだろ。後、三人称で百合やっても面白くない』

……ちょっとこれはヒドイですね。体の特徴であだ名つけたりするのはよくないです！　え、スタッフさん、なんですか？　けいおん！のコミックのカバーを外してよく見ろ??
……。

（しばらくお待ち下さい）

えぇ、ゴメンなさい。落ち着きました。ムギ先輩本人公認なのですね（笑）……たくわｎ……ぶほっ……はははははははははははははははははははははははは（フェードアウト）

（もうしばらくお待ち下さい）

はあ……はあっ……っつあはははははははっう……はぁ……おなかが……ッ！　……はあっ！　…痛い……ォエ……グッ……オぶッ……（切断）

（いましばらくお待ち下さい　大変御迷惑をお掛けしております）

……大変申し訳御座いませんでした。深く反省を致しまして、スタッフ一同、心よりのお詫びを申し上げます。……ゴメンナサイスミマセンゴメンナサイゴメンナサイ　ホントにすみませんでした。スミマセン！　え？　いいから続けろ？　いいんですか？！　有難うございます！！

えぇっとユリってあれですよね、女の子同士の恋愛ですよね？筆者が惚気耐性皆無というのもあるようなんですが、どうにも艶のある文章じゃないと書いてて嫌だとかほざいてるらしいんですね。澪律で掌編書いてみたけどなんかダメだった　ｏｒｚ　とのこと。……わたしと唯先輩？　梓憂？　なんの事ですか？　え？　おかしなことを言わないでくださいｗ　まあいいです。

続けます。ラジオネーム『ｕｎｔａｎ２』さんからのお便りです！　（じゃじゃん！！）

……え？　いまわざと飛ばそうとしただろうって、何をですか？　えぇ！　わかっていますよ！　分かっています……

にゃんにゃん！　あずにゃん！　あずにゃんにゃん！

あ、収録終わってからお話ししたいことがありますけどいいですか。

それでは『ｕｎｔａｎ２』さんからのお便りをご紹介します！

『マユゲのあつかい良すぎねぇ？　つーか、あの辺りの新解釈なんなの？　馬鹿なの？　死ぬの？』

あーｗ　こりゃあ辛辣ですねｗ
朝倉先輩ですよね？　本人も悩んでました『私がこんなに幸せになっていいのかな……』だそうですｗ
え？　目が笑ってない？　やだなぁー、原作の悪役確定キャラクターが、なんで主人公追い出して、普通にメインキャストに収まってるんだろう？　だなんて思っていませんよぅ？

え？！　あずにゃんは原作メインキャストなのに本編出演無いよねですって？！

……ブチコロスぞゲスやろう。表でろや！！　この（猥雑表現に付き自己規制）が！！！！

……うっ……ぐすっ……えぅ……なんでさわちゃん先生や喜緑先輩にまでチョイ役あるのに、わたしは伏線すらないんですか！！　……うぐぅ……すびーー

わかってるですって？　全然分かってないです！！　大体なんなんですか？！　この売れないバラドルの深夜番組みたいな番組構成？！　わたしこれでも現役美少女女子中学生なんですよ！

え、ＥＤコールですか？　何事もなかったようにエンディングテーマ流すんですね……。　はい続けます。

それでは、エンディングでーす！　今週もお便りいっぱいありがとうございましたー。このコーナーは皆様のお便りによって成り立っています。街角で見かけた先輩方の情報とか、宇宙人、未来人、超能力者、異世界人の情報があったら、あずにゃんのところまでメールしてね☆

それではまた来週お会いしましょう。

にゃんにゃん！　あずにゃん！　あずにゃんにゃん！！

（収録後、楽屋にて）

これでいいんですよね？　え？　……まぁ確かにこの境遇で結構鍛えられていますから、さすがにプロとして仕事はこなすことぐらいは分かりますよ。

番組はさ、わたし一人ではなくてスタッフ全員で作り上げる物なんだよね。それはわかっています。わたしのミスを隠してもらわないと放送事故で番組自体がなくなっちゃていましたもんね（笑）

えぇ分かっています、私もね……唯先輩の、何か理由が無くても一生懸命なところ。それだけで彼女はすごいなとおもうんです。わたしもちょっとは見習わないといけないですよね。

あーぁ、わたしもがんばらないとな……

それじゃお先にあがります。おつかれさまでしたー。

■SOS　#06

「えぇ～文芸部会誌ですか？」
「そう」
「ほぅ……ずいぶんと急な話ですね。長門さんの提案に乗る事はやぶさかでは無いのですが、会誌を発行する事になるといくつか準備をしないといけません」
「みくるちゃん！　おかわり！」
　木々が勢いを増し、セミの断片的な鳴き声が聞こえ始めるようになった季節の初め。北高文芸部では、長門有希より珍しく、というより史上初の提案があった。この文芸部の存続を賭けて、生徒会執行部より会誌の発行を申請されたということであった。
　平沢唯は元気よく手を挙げて尋ねた。
「ところで長門先輩、文芸部会誌ってなんですか？」
　長門は唯の顔をじっと見つめる。一度目を逸らし、考え込む様なそぶりを見せた後、ゆっくりと語り始める。
「文芸部会誌とは、この惑星の知的生命体がコミュニティにて、情報を個体間に留まらず共有するため、不可逆性の高いコードを用いて生成したドキュメント。それを北高文芸部にローカライズしたケースだと分析される」
　長門はその長文を語り終えると唯の目を真剣な表情で見つめて頷く。そして何事も無かったかのように文庫本を開いた。
　微笑に翳りが入ってしまった古泉一樹がフォローを入れる。
「平沢さん、つまりはですね文芸部の皆で本を作ろうということなんですよ」
「ほぇ～そうなんだ」
　二人の会話を聞いていた朝比奈みくるは、不安そうに言った。
「でもどうしよう、涼宮さんがいないとみんなのジャンルが決まりません」

文庫本に目を落としていた長門が顔を上げて答える。
「問題ない。わたしがくじを作った」
「えぇ！　そうなんですか？　それなら安心ですね」
長門は、机の引き出しから、四つ折りに畳まれた小さな紙片を取り出した。
いつの間にか窓際に回り込んでいた古泉は、長門に耳打ちをした。
「長門さん。平沢さんの事なのですが、彼女の事情を刺激する事態はあまり……」
「理解してる。こちらで情報操作を行っている」
「これはこれは……、余計な心配になってしまいましたかね」
ふっと表情を緩めた古泉は窓枠に背をもたせかけた。長門はその小さな手のひらにクジを載せて、指でシャッフルする。
「文芸作品のジャンル四種を記入した。各自確認の上、起稿するように」
古泉はクジを引いて確認した。
（フーダニットですか。古典ミステリーですね。長門さんは……ジュブナイル。少々、ジャンルの幅が広すぎるような気がしますが彼女なら大丈夫でしょう。平沢さんは……童話。まぁ妥当な所ですかね。朝比奈さんは……――）
みくるが引いた籤には、墨痕も鮮やかな明朝体でこう書かれている。
【ボーイズ・ラブ】
後ろから覗き見ていた古泉はあからさまに肩を落としてしまった。
「ぼーいずらぶ？　わたし、ちょっと文学のジャンルには詳しく無くって……どんなジャンルなんでしょうか長門さん？」
「今日はそんな朝比奈みくるのために資料を持ってきた」
長門は抱えた学生カバンより数冊の野球服を着た美少年のアニメ絵が表紙の小冊子を引っ張りだして、机の上に並べた。みくるは物珍しそうに一冊を取ってめくり始める。
「へえ、長門さんはマンガも読むんですねぇ。……っ

！？」
その冊子をパラパラとめくっていたみくるは顔を紅潮させて、食い入る様に冊子に顔を埋めてしまった。
みくると長門は顔を見合わせると、無言かつ高速で頷き合った。
「長門さん……この本借りても良いですか？」
「問題ない。この『狼と甲子園ボーイ』は全八巻。今日はその内三巻を持ってきた」
「へぇー、いいなぁみくるちゃん。わたしも読んでいい？」
うらやましそうにその同人誌を眺めていた唯が、一冊取ろうとして手を伸ばす。その手を長門はがっちりと掴んだ。
「あなたは、駄目」
「えぇ！　なんで？　長門先輩のけち」
古泉は長門の肩に手をやり、振り向いた長門に微笑みかけて、一気に窓際まで引きずり込んだ。
「……長門さん！　あなたは一体何を考えているんですか！」
「……」
「先ほど平沢さんに悪影響を及ぼす可能性は避けるように言ったはずですよね？」
「問題ない。情報操作で平沢唯がＢＬを引く可能性は０％」
長門は相変わらず怜悧な無表情で淡々と応じる。古泉はかぶりを振って反論した。
「しかしそれなら、わざわざボーイズラブなんて危険なジャンルを選ぶ必要はなかったのではないですか？」
「……」
古泉は背中越しに、赤い顔でふらふらしているみくるを親指で示す。みくるは時折死んだように机に突っ伏せながらも、それでも必死にＢＬというジャンルを理解しようと勉強しようとしていた。
「彼女はあの通り真面目な努力家です。あれを本気にしてしまったらどうするのですか？」
「……」

「それにこのような冗談は、貴女らしからぬ行為だとおもうのですが？」
「問題ない。マーケティングは完璧。主流では古泉一樹は攻め。もしくは誘い受け」
古泉はほとんど挫けそうになりながらも良く耐えた。
「長門さん……僕がいま問題としているのはそのような事ではありません。いやカバンを漁り出さないでください！　別に証拠とか要りませんから！」
「残念」
ぐったりとしている古泉を傍目に、軽やかに長門は席に戻る。ふと窓の外を見つめ、最終下校時間が近づいていることに気がついたようだ。席に置いてあった文庫本に栞をはさんでカバンに入れる。
「あっ、長門先輩帰るんですか？　私もそろそろ帰らなきゃ」
唯は急いでパイプ椅子を片付けて、部室を出て行こうとする長門の後を追った。
「それじゃぁ、今日もお疲れ様でした！」
唯は振り返り、無邪気な笑顔で挨拶を残して帰路についた。
あとには、砂浜に打ち上げられたクラゲのように机に髪を広げて微動もしないみくると、鬱々とした表情で窓の外を見下ろしている古泉が、夕闇近づく部室の中で取り残されたのだった

□K－on　#06

山中さわ子は退屈していた。
他の教員達は、先日あった期末テストの対応に追われている様である。しかし、クラスも持っておらず、必修科目外の音楽の専任教師であるさわ子にはあまり関係の無い事だった。昼休みでも、忙しそうにしている同僚の教員達に気を使いながら弁当を片付けると、背もたれを傾け、小さく伸びをする。
「ふぁ……」
「先生、ちょっといいですか？」
瞼をこすり、さわ子が振り返ると、長い黒髪の女生徒が気まずそうして立っていた。
「あはは、誰かと思ったら澪ちゃん。大丈夫よ」
「その、少し相談したい事があって……そのここでは話にくい事なんですが……」
秋山澪はもじもじと手をもてあそびながら、視線を職員室に彷徨わせていた。さわ子はそんな澪の態度を不思議に思いながらも語り掛ける。
「じゃあ、立ち話もなんだから、音楽準備室にでも行こっか？」
「えっ！　あ、はい」
さわ子は事務デスクの引き出しから、プラスチックのプレートが付いた鍵を取り出して、のんびりと立ち上がる。澪はそわそわと落ち着かない様子で、さわ子の後ろから付き従ってきた。

音楽準備室は、しばらく人の立ち入りが無かったようで、埃くさかった。窓を開け放ち空気を循環させる。重ねられた丸いすから、澪と自分のものを外して教職員用の机の側へ置いた。
「澪ちゃん。そんな所にぼんやり立っていないで、座ったら？」
「あっ、はい！　すみません……」

「で、相談って何？　恋バナ？」
「えっ？！」
「ラッキー、キャンディみっけ。澪ちゃん食べる？　キシリトール入りだって」
「いえ、私は……」
さわ子は戸棚に置き忘れられていた、のど飴の包み紙を剥がして口にする。そんな様子を澪は呆れた表情で見ていた。やがて、意を決したようにして澪は話し始めた。
「あの、先生。軽音部での事なんですが……――」
秋山澪の相談を要約すると、こういう事である。
澪が不用意な発言で、涼宮ハルヒの事を傷つけてしまった事。それ以後、二人の関係がギクシャクとしてうまくいっていない事。彼女はそのことを深く気に病んでしまっているようだった。
「――ふーん」
「それで、私はちゃんとハルヒに謝らないといけないと思っているんですが、うまく二人になれるタイミングが無くて……」
「ちゃんと謝ったんでしょ。ならいいんじゃないの？　ちょっと話がかみ合わなかっただけなんじゃない？」
「いえ、でも私が変なことを言ったせいで……」
澪はそういうと黙り込んでしまった。平静を装う風にしてはいるが、瞳にじわじわと涙がにじんできている。
さわ子はやれやれと、めんどくさそうに頭を掻く。
「澪ちゃん。ちょっとそばに来て」
「……えっ？」
「手、見せて」
さわ子は澪の左手を取ると、指先で押しながらなぞる。裏返してみたり光に透かしてみたりして丹念に確認する。
「ふ～ん。ちゃんと練習はしているみたいね」
「あの……先生……？」
「もうちょっと側に来て」

澪はおずおずと、さわ子の側に寄る。それを見たさわ子は爽やかな笑顔で、
――いきなり澪のバストを鷲掴みにした。持ち上げるように揉みしだく。
「うーん、やっぱりでかいなー。前々から注目はしてたのよね。腰もめちゃくちゃ細いしさ。Fカップ？」
「なっ、な……、なにすんだ、このエロ教師！！！」
澪はおもいっきり拳骨を振り下ろした。すこーんと桶を叩いたようないい音が響く。
「いったぁー！　いきなり何するのよ！？」
「いきなり何するはこっちの台詞だ！　エロ親父かあんたは！」
「肩の力を抜こうと思ったのよ。そんなに胸が大きいと肩が凝るとおもって……」
「おまえは妄想が止まらない中学生か！」
胸元をおさえてぷるぷると震える澪に向かって、さわ子は手をわきわきさせながら迫る。
「いいじゃない減るものじゃないんだし」
「いいや減る。揉まれると確実に減る！」
澪はもう！と言って背を向けてしまう。さわ子はその背中を見て苦笑いをしてしまった。口調を改めてさわ子は話はじめる。
「あのじゃじゃ馬娘ね。私が軽音部に立ち入りする度にすごい眼で睨んでくるのよ」
「え……」
「わたしもさ、初めあなた達みたいな普通の女の子だけでバンドやっていけるのか心配でちょくちょく様子見に行ってたのよね」
「……」
「そしたらあの子がこう言うのよ『私達は私達の力でやっていける。あんたの心配する必要は無い』ってさ」
「……」
「あの子は、澪ちゃんが思っている以上にあなた達の事を信頼して

いる。少しぐらいケンカしても許してくれるはずよ」
「そう……なのかな……」
「澪ちゃんはもうすこし自分自身に自信を持つようにした方がいいんじゃないかな？　あなたは自分が思っているよりは、ずっとすごい人間なんだからさ」
うなだれてしまっている澪の肩にさわ子はやさしく手をやる。
「まぁそんなに悩まなくたっていいんじゃない。一回失敗したからって、関係がそこで全部駄目になるって訳じゃないんだから」
「……そうですよね。私が逃げていたらしかたないですよね」
澪は椅子から立ち上がる。
「どこへ行くの？　澪ちゃん」
「もう一度、ハルヒと話し合ってこようと思います」
「そう、頑張ってね」
「相談にのってもらって、ありがとうございました」
「いいえ、いいのよ退屈だったし」
さわ子はいたずらっぽく笑う。澪は一礼をして、音楽準備室を去っていった。
「さてっと、そろそろ帰えんなきゃまずいわよね」
澪が出て行った後、さわ子は音楽準備室の戸締まりを始める。そのときだった、部屋の奥から何かが崩れ落ちるような音がした。あわててその音の正体を見極めると、備品のエレキギターが倒れていた。
さわ子はそれを元に戻すために、近寄って手に取った。しげしげとギターを見つめる。
「……こんな学校の備品で、ギブソン・レスポールだなんて珍しいわよね」
手にしていたギターを用具入れに戻す。さわ子は部屋の片付けをした後、音楽準備室を出て行った。
昼休みの終わりの予鈴が大きく鳴り響く。予鈴の反響音が消えると、音楽準備室に元の静寂が取り戻された。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9467g/

涼宮ハルヒのけいおん！

2010年10月12日13時40分発行